
咲-saki- ~ 福路美穂子の恋路・告白編 ~

laziness

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

咲 - s a k i - 〈福路美穂子の恋路・告白編〉

【Nコード】

N 8 7 8 2 N

【作者名】

l a z z i n e s s

【あらすじ】

咲 - s a k i - 二次創作

（前書き）

風越女子の福路美穂子×男オリ主のお話です。
苦手な方はブラウザバック推奨。

貴方を初めて見たのは、7年前の世界大会。

何人をも寄せ付けない圧倒的な強さで、華麗な打ち筋で、見る人全てを魅了していたその姿に、私もまた心を惹かれました。

貴方と初めて会ったのは、3年前の入学式。

居並ぶ先生方の中にあつて、数多の同級生が並ぶ中で、けれど、私の瞳には貴方の姿がハッキリと映っていました。

貴方と初めて話したのは、3年前の春先。

伝統ある風越女子の麻雀部の顧問を務めていた貴方は、あの時とは違った貫禄を見に纏っていて、とても美しくて。

貴方は覚えていますか？

私と初めて会った日の事を。

貴方は覚えていますか？

私と初めて交わした言葉を。

「キャプテンの様子がおかしいんだし」

風越女子麻雀部部屋にて、新入生部員である池田華菜は唐突にそんな事をのたまった。

季節は初夏も間近な頃とあって、さては頭の中に色々湧いて来たのか……と、同じく新入部員である吉留未春は割と失礼な事を考えつつ眼前のネコ少女の愚痴を右から左へと聞き流していた。

「最近妙にため息つく回数が多いし、時々上の空になってるし、かと思っただけ急にきよどってるし……」

「……………気のせいじゃないの？」

「気のせいじゃないんだしっ！絶対変だしっ！！」

バン！と机を叩き華菜が叫ぶ。

一応今は昼休みで、此处は一年の教室で。
人こそまばらだが居ないという訳ではないので衆目もそれなりにあ

るのだが、それがまるで分かっていないのか「ぐあーっ！」と叫ぶ目の前のネコ少女に胸中で嘆息を洩らす。

「つうわけで、協力して欲しいんだし」

「……………何に？」

聞きたくはないのだが、聞かざるを得ない程に鋭い目の前の少女の威圧感に、仕方なく未春が問いかける。

すると華菜は我が意を得たりとばかりにむふふと鼻をならして、

「モチ！キャプテンの尾行だしっ！！」

ビシッ！！と音が鳴りそうぐらいに指を立て、清々しい程の笑顔でそう宣言した。

その姿を見て、未春は思わず頭を押さえてため息を洩らす。

止めても無駄だろうとは理解していたが、それでもやっぱり止めるべきだったか。

……………まあ、そんな事をして今現在一人で勝手に盛り上がってるこのネコ娘の暴走が止まるとは到底思えないのだが。

その翌日。

「むうう……………」

校舎の影からコソコソと覗く二人。

その視線の先には、部活で使っているシートやら何やらを洗っているキャプテンこと、福路美穂子の姿がある。

傍から見れば完全無欠にストーカーである。

「キャプテンは毎朝一番に登校して、天気の良い日は必ず朝練前に洗濯物を済ますんだし」

「……………その為に、態々朝7時集合とか言ったの？」

「あたりまえじゃん」

何を言っているんだし、とでも言いたげな視線を向ける華菜に、未春は「はあ……………」と隠す事無くため息を洩らす。

と、その時

「お？今日も福路が朝一か」

（にやつ！？）

ぐわっ！と一気に表情を変えて華菜が視線を戻す。

それに釣られて未春も視線を向けると、そこには此処数週間で見知った顔があつた。

「あ、金子顧問だ」

金子透。

此処風越女子の国語教諭であり、麻雀部の顧問でもある彼は、その穏やかな物腰と確かな腕前の持ち主である事から生徒に多大な人気を誇る。

滅茶苦茶に厳しいコーチであるOGの久保という人物を迎えたりと、その活動は実に精力的で、未春自身もまだ知ってから間もないもののそれなりに信頼を寄せている人物である。

「毎朝毎朝頑張るよなあ、お前」

「こ、これでもキャプテンですから」

「んな肩肘張らなくてもいいのにな」

言つて、金子顧問が薄く微笑むと、何故か福路の頬に朱が差す。

「あれ？」と未春が疑問符を浮かべるのもつかの間

「キャプテンっ！！」

物凄い勢いで華菜が疾走した。
そしてそのままの勢いで二人の間に割って入ると、一瞬金子顧問に「ぐるる！」と威嚇する様な視線を向け、次いで福路に「にやははっ！」と満面の笑みを見せる。

何だこの状況。

朝練は基本的にフリーでの対局となる。
キャプテンである福路は勿論、顧問である金子やコーチである久保も参戦してくるので、朝から非常に空気がピリリと引き締まる。

「ロン、だな」
「に、やつ！？」

その一角、校内ランキングでも上位に食い込む　華菜を含む
三人を相手に、金子顧問は実に手堅い雀風で着実に攻める。

華菜が役満狙いで切った牌から一気に繋げ、あれよあれよという間に跳満。

となれば当然……

「池田ア!!」

やはりというか何と云うか、コーチがキレた。

「んな大雑把な攻めが通用する相手かどうぐらい区別つけたらどうだっ!?!」

この久保コーチ、かなり厳しい。

それは新生生はおろか、この麻雀部に所属する部員全てに共通する見解である。

「……ま、この役狙いじゃこれ以外は切れないだろうけど」

言っつて、苦笑いを浮かべながら金子顧問は華菜が切った牌を摘む。

「でも、だからといって相手に読まれて逆に攻められたら折角の役満も泣きだろ?」

「はい……」

華菜が頷くと、金子顧問は軽く華菜の頭をポンポンと叩く。

「だったら、次にまた同じ間違いを繰り返さない様に。……ハイ！
みんなも自分の対局に戻りなさい！」

柏手を打って、金子顧問はぐるりと室内を見回す。

その言葉に従って、止まっていた対局は次々と再開されていく。
久保コーチは何か言いたげだったが、大きく息を吐くと自分の席に
戻る。

正に飴と鞭である。

そう思っていた未春は、一瞬見落としていた。

華菜の頭に金子顧問の手が置かれた時、ほんの僅かに福路の表情が
変わっていた事を。

誰かに恋する、という事はとても素晴らしい事だと思う。

それは世界を鮮やかに彩ってくれるものだ、色んな本やドラマで

も言われていたから。

でも、実際はそんな事無い。

「金子先生！」

「ん？どした福路、何か質問か？」

恋した人が、大人だったから？
恋した人が、先生だったから？

だから、私はこんなにも醜くなってしまったの？

「今度の大会に持っていく荷物を運ぶのって今日ですよね？」

「あ……ああー、そういやそうだったな」

「運ぶの、手伝いますよ」

「はあっ！？いや、俺一人で充分だって！女の子にあんな重たいの持たせられないって」

貴方はきつと気づいてくれなくて。

私はきつと気づいて欲しくなくて。

こんなに汚い感情がドロドロと渦巻いて、こんなに醜くなってしまった私なんか、貴方には相応しくなくて。

だから、私は少しでも貴方に気に入られる様な「優秀な私」を演じる。

汚い「本当」を隠して、醜い「本当」を隠して、綺麗な「嘘」を演じる。

「いいんです。私が手伝いたいから手伝うんです」

「……………ハア。好きにしろよ、もう」

それで貴方の傍に居られるのなら、私は何時までもその「嘘」を演じ続けます。

貴方の近くに居られる事が。

貴方の傍で笑っていられる事が。

私の幸せなのだから。

「福路イ！！」

今日も今日とて、コーチの怒声が響く。

しかしその声が呼んだ名前があまりにも珍しく、思わず部員達は声

のした方に視線を向けた。

見れば、肩を震わせて福路が俯いているではないか。

「テメエ、キャプテンのくせして何遅刻してやがるんだア!？」

それに気づいているのかどうなのかは不明だが、鬼もかくやという形相で睨みつけ、久保は息づく暇も与えず怒鳴りつける。

と、

「ちょ、久保さんタンマタンマ!」

酷く慌てた様子で金子が割って入った。

「アア!？何だってんだ金子オ!!」

「とりあえず落ち着いて!遅れたのにはちゃんと理由があるんだからさ、ね!？」

「風越のキャプテンが遅刻なんかして許されるとでも思ってたのかア!？」

「だから理由があるって言ってるでしょ!？」

何時になく声を張り上げる金子にギョツとしながらも、しかし久保は憶面にも出さず続ける。

と、その時

「こめっ……なさい……」

震えた声音でそう呟いて。

それが鼓膜を震わした時には、福路は身を翻して外へと飛び出していた。

「ッ！？福路！！」

数瞬遅れて、金子も外へと向かう。

ほんの一瞬、キツと鋭い目を久保に向けたが、それに気づいた時には既に金子もまた部屋から姿を消していた。

「……チツ、何だってんだ」

虫の居所が悪そうに、久保が吐き捨てる。

そこに至って、漸く衆目に気づいたのだろう。

「テメエら、何ぼさつとしてやがる？さつさと打て！..」

そう怒鳴り、久保もまた外へと向かう。

肩を怒らせて歩くその様を、部員たちはただ眺める事しか出来なかった。

「福路ッ!!」

駆け寄り、どうにか見つけたその華奢な肩を鷲掴んで金子が叫ぶ。

「イヤッ!は、放して下さいッ!!」

「何でさっきからそんななんだよ!?! 一体何が気にいらねえんだっ!?!」

振り返りざまに拒絶の意を示す福路に、珍しく怒りを露わにして金子が問いかけた。

だが福路は駄々を捏ねる童子の様にいやいやと首を振り、愚図る様に涙をポロポロと零すだけで理由を話そうとしない。

「……ッ、いい加減にしろよっ！」

か細い手首を掴み、一気に引き寄せて金子が怒鳴った。
瞬間、福路が彼の胸元に飛び込む様に収まる。

「ッ！？だ、駄目ですッ！こんな……！」
「さっきの陰口か？」

問うた瞬間、福路の肩がビクリと震えた。

『アンタみたいなウザい奴がうるちよろしてたら、金子先生が迷惑
だって分かんないわけ？』

生真面目過ぎる彼女は、その性情故に何かと不興を買いやすい。
年下に慕われる半面、同期や先輩には煙たがられるのだ。

『アンタみたいな奴と、あの人釣り合う訳ないじゃん』

だが、その理由に自分が絡んでいるとはまるで考えていなかった金子は、声が聞こえた瞬間から思わず足を止めてしまった。

『分不相応なのよ！少しはあの人の迷惑も考えなさいよ！！』

その言葉がなければ、多分この先もずっと気づかなかっただろう彼女の想いが、図らずも分かってしまったのだ。

「……………」

静かに胸の中で泣きじゃくる彼女を抱き締め、子供をあやす様にその頭を撫でる。

ブラウン色の髪の毛はさらさらとしてとても綺麗で、けれど、今の彼女は消え行ってしまうくらいに儚くて。

「……………あのさあ、福路」

その名前を呼ぶと、彼女の細く小さな身体がビクリと震える。

「……………他の奴らの言う事に一々振り回される必要、あるか？」

ポン、と軽く後頭部を叩いてやり、

「お前の人生はお前のモンだ。他の誰でもない、お前自身が決めていかなきゃならない道なんだ」

言って、その顔を無理やりこっちに向かせた。

あーあ、酷い泣きっ面。

「で……でも、わた、私………」
「ウザいとか、そんな事気にしてやる意味が俺にはそもそも理解出来ん」

コツン、とおでこを合わせて言うと、直ぐ目の前に彼女のブラウンの瞳が見えた。

「自分を偽ってまで、俺はお前に笑っていて欲しくなんかない。自分に素直であって欲しいって願うのは、教職者たる者の務めだし……」

そこで一旦区切って、フツと微笑んだ。

「……俺個人としても、お前には素のままでいて欲しい」

瞬間、奪う様に唇を重ねる。

涙でちょっとだけしょっぱいそれは、最高級のスポンジの様に柔らかい。

丁寧に、けれど強引に、俺はそれを奪う。

抱き締めていた肩の震えは、何時の間にか止まっていた。

「ツモ。12000オール」

凜とした、実に彼女らしい声音が部屋に響く。
声の主たる福路キャプテンの勇ましい姿は、見ている此方まで勇気づけられる……筈なのだが。

「ううう……」

何故か落涙して机に突っ伏す輩が一人。

「どうしたの？キャプテンは元気になったし、万々歳じゃないの？」

「……………ぬぁにが、万々歳よ」

ゴゴゴ……………と効果音が聞こえそうなくらいに目をぎらつかせて華菜が言う。

と、その時、

「お？美穂子は今日もトップか」

なんて声が響く。

瞬間、何故か部室内にピンク色の空気が発生した幻覚を未春は垣間見た。

「あつ、金子先生！」

……………いや、幻覚ではないだろう。

恐らく、いや確実にその空気の発生源たる我らがキャプテンは、まるで外で満開となりつつある向日葵の様に鮮やかな笑みを湛えて金

子顧問を迎える。

「よし、じゃあ次は俺と……三島、橘、入って貰えるか？」

「ふふっ、今日は負けませんよ」

「おお？言う様になったのお、こやつ」

「ひゃ……も、もうっ」

「ふふ、愛い奴よのお？」

……何だこの状況。

「うちの部って前からこんなにゆるかったっけ……」

「……さあ」

呟いたそれに深堀が答える。

今現在、3年の大会の監督として出張中の久保コーチがこの時ばかりは必要に思えた。

私は、貴方の事が好きです。
誰よりも、誰よりも、貴方の事が大好きです。

どんなに言葉を使っても、きっと言い表す事が出来ないくらいに、
貴方の事が好きです。

だから、私はもう「私」を偽りません。
素のままの私を、きっと好きになって貰います。

だから
だからどうか、その時は。

私と、生涯を共に添い遂げる誓いをしてくれませんか？

（後書き）

作者は部キャプも好きです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8782n/>

咲-saki- ~ 福路美穂子の恋路・告白編 ~

2010年11月24日09時49分発行